



## カンブルランが語る 〈アッシジの聖フランチェスコ〉の秘密

### 恐怖を忘れ、乗り越えて、 喜びの感情へ

読響常任指揮者のシルヴァン・カンブルランは、メシアン<sup>めいそう</sup>の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉を既に計24回も指揮した経験を誇る、この作品の権威です。現代音楽の研究者や愛好家で作る日本アルバン・ベルク協会が4月16日に行ったレクチャー（司会は音楽評論家の長本誠司氏）でも、傑作の魅力や聴きどころを熱心に解説しました。その模様をお伝えしましょう。（文責：事務局）

#### 歌手もオーケストラも「語る」 瞑想的なオペラ

「読響と〈アッシジの聖フランチェスコ〉を共演することになった経緯は」

読響を本格的に指揮するようになって3〜4年たつうちに、このオーケストラとなら何でもできると思うようになりました。そこへ楽団側からオファーがあり、十分な練習時間が取れることなどを条件にOKを出しました。新たに読響とこの作品公演を作り上げるのは、大きな喜びです。初めて読響を

振った時に選んだのも同じメシアンの〈トゥランガリラ交響曲〉でした。〈アッシジ〜〉を共演できるほどに機が熟したのです。

「公演は演奏会形式ですが、舞台演出がある場合と、どんな違いがありますか」

お客さんには大きな違いでしょうが、演奏する側にはそれほど大きな差はありません。オペラには視覚的な要素が不可欠なものと、そうでないものがあります。〈アッシジ〜〉は演出がなくても十分に音楽だけでイメージで

きる作品です。オーケストラも歌手も共に語り、歌う構造になっているからです。また普通のオペラと違って瞑想的で、神やイエス・キリストの痛みを共感するところがストーリーの核。あまりオペラ的ではないオペラゆえ、演奏会形式でも真価を伝えられるのです。〈演奏会形式のメリットは大きそうですね〉

作品の細かい部分が、演出に気を取られずに、きれいに聴こえてきます。また、オーケストラの前に歌手を配置するので、歌の細かいニュアンスが会場に直接届きやすくなります。歌手も音楽により集中できますし。指揮者にとっては、演奏全体のバランスが取りやすくなる。合唱は楽譜を持って歌えるので、この難しく長大な作品の暗譜の苦労が少し楽になります。

「出演者には、この作品を初めて歌う歌手が多くいます。キャストिंगの狙いは」

次の新しい世代に歌ってもらいたい



天使役を務めるハンガリー人ソプラノ歌手のパラト。ヘンデルやバッハなどバロック音楽を得意とし、今回〈アッシジ〜〉に初挑戦する ©Zsofi Raffay

という気持ちから、初役とする歌手を選びました。作品を生かし続けるためには、新しい歌手に歌ってもらわねばなりません。

#### オーケストラの奏でる 音自体が劇に

「メシアンはどんなオペラを目指したのでしょうか」

メシアンが意識したのは神劇です。中世からのスタイルをイメージして書いたのだと思います。だから、世界初演となった1983年の舞台は作曲家自身の希望もあって、演劇性の薄いスタティックな作りでした。ただし演劇性は音楽そのものの中にあって、オーケストラが奏でる音自体が劇になっています。その意味では、ドビュッシーの歌劇〈ペレアスとメリザンド〉に通じるところがあり、一つ一つ言葉が聞き取れるように書かれています。ライトモチーフ（示導動機）もたくさんちりばめられていますが、ワーグナーのような使い方ではなく、むしろベルクの歌劇〈ヴォツェック〉と似ています。〈「アッシジ〜」の音楽面での聴きどころや焦点はどこにありますか〉

メシアンの音楽は、時間の流れが特徴です。ものすごく速いところと、時間が止まったように遅いところが混在する。〈アッシジ〜〉では、前者は鳥

の声です。演奏すべき音符が山のようにあるパッセージが続き、こちらも指揮棒を忙しく振り続けられないといけない。後者では、永遠のような時の流れでテンポがゆっくりした部分が登場します。そこでは指揮者は、拍が消えてしまうような振り方をしないとけません。このどちらにも同じような高い集中力と緊張感が生まれてきます。昆虫の時間の流れ方と、星の世界での流れ方、両方が登場するとも言えます。

《作品の本質は、どう理解すればよいですか》

大きく三つの幕に分かれ、全体を通じて、恐怖を忘れ、乗り越えて、喜びの感情へ到達するための試練が語られます。この作品が世界初演された1983年は、世界中でAIDS（エイズ＝後天性免疫不全症候群）という病が大きく注目された時でした。フランチェスコは重い皮膚病患者にキスをして、恐れをひとつ、愛の力で初めて乗り越え、自由になっていきます。初演に触れた観客は、エイズをこれと比較できる恐ろしいものと感じたがゆえに、作品に強く共感できたのではないのでしょうか。

《天使も重要な役割を果たしますね》

天使は音楽でもって奇跡を起こします。フランチェスコは、天使の言葉である音楽を聴いて、天からの啓示を受けるわけです。音楽を通じて天使の言

葉を読み取るのです。巨大な編成のオーケストラには、20世紀初頭に生まれた電子楽器オンド・マルトノが3台必要です。第2幕では3台が同時に鳴り、合唱も加わる部分が出てきます。このオンドの音が天使の声のように聞こえ、分かる人には天の啓示として聴き取れるのです。

《この作品はメシアン<sup>メシアン</sup>の創作上、終着点と言えるのでしょうか》

メシアンは長年オペラを書こうとしませんでした<sup>けいけん</sup>でしたが、最終的に作るとなった時、敬虔なクリスチャンの彼はこの題材を選びました。メシアンは自分の作品に、いつも何らかの形で信仰を採り入れています。教会オルガニストを長く務めたこともあり、彼の信仰性が〈アッシジ〜〉にも大きく表れています。彼が蓄積してきた作曲技法や経験のひとつの集大成とは言えますが、それらがカタログのように出てくるわけではない。長い曲で編成も大きいので、代表作であることに違いはありませんが。

### 宗教を超えた 普遍的な精神性

《メシアン作品に濃厚なカトリシズムは、日本人にとって厄介な壁ですが、この音楽はもっと普遍的なものなのでしょうか》

カトリックを理解できないと、この手の音楽は理解できないと言われることがあります。私はそうは思いません。バッハの受難曲を聴く時は、聖書や宗教を知らなくても十分楽しむことができますし、モーツァルトの〈レクイエム〉やベートーヴェンの〈ミサ・ソレムニス〉にしても純粋に音楽として楽し

めます。それらとメシアンは、まったく同じ。メシアンの音楽は、宗教を超えた精神性を私たちに訴えてくる。特定の宗教と結びついていない普遍的な部分があると思います。

《それならば、メシアンはもっと身近に感じられることでしょうか》

メシアンが音楽を通じて常に私たちに伝えたかったのは、人間は自然界の一員であり、自然とは兄弟なんだ、という部分だったと思います。風や水や火も、すべて兄弟姉妹であると。恐怖を乗り越え喜びに至る行いは、人間なら誰も望むもの。それを手助けしてくれるのが自然であり、聖霊なのかもしれません。

ワーグナーの楽劇〈パルジファル〉にも儀式や宗教的題材が出てきますが、それらを超えて音楽として私たちに訴えてくるものがある。そうになると〈アッシジ〜〉には〈パルジファル〉に近い点があるのでは、と感じます。詰



2011年マドリード王立劇場での〈アッシジ〉公演より ©Javier de Real

まるところ、メシアンの音楽の根底にあるのは「弱さを持つすべての人への愛」に尽きます。いろんな形の喜びを音にしていた人なのです。

《マエストロが本作を指揮するたびに感じることはありますか》

もう24回もこの作品を指揮していますが、演奏が終わった後のお客さんの顔を見ると毎回、何か解き放たれたような、心が穏やかになったような表情で会場を後にしていくのが印象的です。メシアンの音楽には、どこか魔法的なところがある。そのマジックが何なのか、言葉では説明しにくいのですが、頭で理解しなくてもいいのではと思います。

正味4時間半という長さは決して長すぎません。この作品に必要な長さだと思います。何も考えず音楽に飛び込んで耳を解放して浸る、そうすれば時間が流れるのすら感じなくなります。

次回は11月号に掲載します



心に残るクラシック

岸田 繁 — ③

Shigeru Kishida

## 世界音楽の金字塔

バルトーク：管弦楽のための協奏曲



バルトーク・ベーラという作曲家に魅せられたのは、10年少し前、ウィーンに滞在していた時のことである。

私は、ウィーン交響楽団のパークッションニストであるフリップ・フィリップ氏と共に、くるりのアルバム「ワルツを踊れ」の制作を行っていた。彼が書き上げた弦楽器の譜面は、少しばかり調性が曖昧で、場面展開や変化が少ないロック的な楽曲に、多彩なアプローチや繊細なアーティキュレーションを用いて、不思議な彩りを添えた。それは決してカラフルなものではなく、点描画がモノローグのように蠢く、少し不気味にも思えるサウンドだった。

私はその譜面をととても美しいと思ったのだが、一体どういう着想からこのような譜面が出来上がったのか、彼に訊いてみた。彼の答えはシンプルだった。「君はバルトークは聴かないのかい？」

たまたまウィーン交響楽団の演奏会でバルトークの〈弦楽器・打楽器とチ

ェレスタのための音楽〉を演奏するので、私はバンドメンバー達と楽友協会にお邪魔して初めてバルトークの音楽を浴びることになった。

奏でられる全ての旋律が緊張感を保ちながらも、思っているのと違う方向へ進んでいく。そして、時には脱臼するかのように、心の中の会話かへし折られてしまう。

全く話が通じないような感覚であるにもかかわらず、なにかと心を鷲掴みにされるかのようなダイナミズムと、不思議な品の良さがクセになる。今まで持っていた「心象風景」だと思っていた自分自身への「縛り」がふっと無くなり、気付けば涙をぽろぽろと流していた。

ベートーヴェンやチャイコフスキーの音楽に照らされる自分自身の「心象風景」も、掘り下げれば「縛り」を取り払わなくては見えてこないものはあるだろう。しかし、バルトークのそれは、私個人にとってとても大きいもの

だった。

前回紹介させていただいたヴィラ＝ロボス、前々回に紹介させていただいたすぎやまこういち氏も、それぞれのルーツはその国やその文化圏の民俗音楽、つまるところ民謡（フォークロア）であり、ウィーン古典派や近代クラシックという素晴らしい器にそれを盛り付けたような、という些か乱暴な物言いだが、土着的な「歌心」が作品のど真ん中に鎮座している。

ハンガリー出身のバルトークは、近隣のブルガリアやルーマニアなど、東欧と呼ばれる文化圏の農民音楽を収集し研究したとされている。私がそれらの音楽に出会ったのも、ちょうどその頃であった。私にとって、当時それらは新しい言語のように得体の知れないものだった。

ブルガリアン・ヴォイスと呼ばれている女声合唱や、ジプシー音楽と呼ばれている民俗音楽などを聴いていると、バルトークの作風との関連性を感じずにいられない。5や7、13などの一聴複雑な拍子が、彼らの「踊り」と



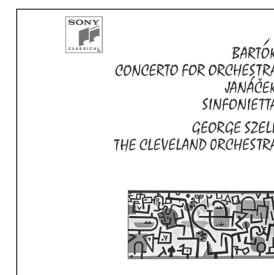
民謡を録音するバルトーク（左から4人目）

深く関係していることや、西洋音楽で一般に「不協和音」と呼ばれる独特の和声、ポリフォニーなどが彼の作風に深く影響していたことが分かる。

私がいちばん好きな作品は、同じくハンガリー出身の指揮者であるジョージ・セルがクリーヴランド管弦楽団とタッグを組み名演を録音した〈管弦楽のための協奏曲〉である。

晩年アメリカに渡ったバルトークは、多くの作品を書き上げたが、その中でも規模の大きいもので、寧ろ「交響曲」と言えるスケール感の大きい作品である。全5楽章に漂うイメージは、暗闇がとぐろを巻き蠢いているような不気味さもある、物悲しい旋律やオーケストラ楽器をふんだんに使った贅沢なアンサンブルが楽しい。第2楽章の脱臼気味でとぼけた雰囲気がある楽想も、東欧の民俗音楽を思わせるエキゾティシズムと、当時のアメリカのジャズを想起させるクールな和音感覚によってオリジナリティ溢れるものになっている。

私にとって「クラシックの名曲」とは「世界音楽の金字塔」なのである。



〈管弦楽のための協奏曲〉（セル指揮、クリーヴランド管）のCD  
ソニー・ミュージックレーベルズ

◎ヴァイオリン奏者

## 外園彩香

Ayaka Hokazono

みんなで音楽を作りあげる  
オーケストラが大好き

「読売日本交響楽団に昨年12月、楽員最年少として入団しました。新人として読響の日々はいかがですか」

読響の演奏会はメインが二つあるような、しっかりとした曲目のプログラムがほとんど。私にとっては新しい曲ばかりなので、いつも譜読みをしている状態です。9月の公演では、ヴァイオリンのクレメールさんとの共演が楽しみ。70歳とは思えないほどエネルギーに満ちた大巨匠ですし、クレメールさんの作り出す音楽を近くで一緒に感じながら演奏させてもらえるのはとても貴重な体験となりそうで、ワクワクしています。

また、今年4月に首席客演指揮者に就任されたマイスターさんも、流れるような指揮で、これから長期的にご一緒できるのが嬉しいですね。ヨーロッパで早くから活躍されている若手指揮者だからこそのアプローチがたくさんあると思うので、その伝統やアイデアを的確にくみ取れるよう頑張ります。こう

して世界的な指揮者やプレイヤーと共演できることも、オーケストラ・プレイヤーの素敵なお仕事だと思います。《東京・八王子生まれ。3歳からヴァイオリンを始める。2007年に全日本学生音楽コンクール全国大会の高校の部で第1位。桐朋学園大学ヴァイオリン科を首席で卒業し、芸大フィルハーモニア第2ヴァイオリン首席奏者として活躍してきた》

三つ上の姉がヴァイオリンを弾いているのを真似て始めました。弾きたいと言い出した時はまだ小さかったので、父が作ってくれたストラディヴァリウスの画像コピーをヴァイオリン型の段ボールに貼り付けて、お箸で弾いていました(笑)。3歳になってからスズキメソッドで習い始めたのですが、すぐ父がタイへ転勤になりました。幼稚園から小学1年生までの5年間、タイとシンガポールで過ごし、タイもシンガポールも当時はクラシックの文化があまりなかったので、母と姉と3人で毎日練習し、練習風景をビデオに撮って日本の先生に送ってレッスンをしてもらったこともあります。小学1年生の頃から、夢は「オーケストラで演奏すること」。物心ついた時から自然にそう思っており、クラスみんなの前で



発表したことを今でも覚えています。

それから、小中高とそれぞれ都内のオーケストラで活躍されている先生に学びながら練習してきました。みんなで一緒に音楽を作り上げていくオーケストラ。これまで学んできたもの、積み重ねてきたものをずっと職業として生かせることに、今幸せを感じています。

「憧れてきたオーケストラへの強い思いと、実際に読響で演奏してみて、印象など違いはありましたか」

演奏会で聴いていた読響には、エネルギーで明るいというイメージを持っていました。入団してもそのイメージは変わりませんが、加えて親密で温かい空気も感じています。今は先輩方のスキルを少しでも盗めるよう学んでいる最中。私は体力や筋力がないので、数か月前から週に1回ジムに通い

始め、体も鍛えています。音楽はもちろん人間的にも素敵な先輩が多く周りにいらっしゃるのので、私も人間の幅を広げていけるよう並行して頑張っていきたいです。

「オーケストラの将来や自分について、これからの夢はありますか」

演奏会のお客さまは、割合として若い人が少ない。特に十代はなかなか見かけません。音楽

家を目指している学生は、練習やコンクールが生活の中心にあります。練習も大事ですが、聴くことも大切。生の音を聴くことがそこに加わったらいなと思います。また、ソーシャルネットワークの活用や、子供や障害者、老人ホームでの演奏など、教育的・社会的な貢献も必要だと思っています。

そのほか、ジャズや民謡といった他の音楽ジャンルにも興味があります。ヨーロッパから入ってきたクラシック音楽のように、日本の古くからの音楽を海外に発信できたらいいなと思い、大学の同級生とグループを組んで年に数回、クラシックをベースにしながら他の音楽ジャンルも取り入れたコンサートを開いています。クラシックと日本民謡などのそれぞれの良さを伝えていけるように、挑戦していきたいと思っています。



20世紀を代表する傑作オペラ、遂に全曲日本初演!

11/19 (日) 14:00 第572回 定期演奏会  
サントリーホール **完売**

11/23 (木) 13:00 メシアン: 歌劇〈アッジジの聖フランチェスコ〉  
(びわ湖ホール・読響 共同主催) びわ湖ホール 大ホール

11/26 (日) 14:00 第606回 名曲シリーズ  
サントリーホール **完売**

メシアン: 歌劇〈アッジジの聖フランチェスコ〉  
(演奏会形式/全曲日本初演)

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

天使: エメーケ・バラート (ソプラノ)

聖フランチェスコ: ヴァンサン・ル・テクシエ (バリトン)

合唱: 新国立劇場合唱団、びわ湖ホール声楽アンサンブル ほか



シルヴァン・カンブルラン

伝説的ドラマーが登場する〈ドラムス協奏曲〉& 名曲〈ボレロ〉

12/ 2 (土) 14:00 第201回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

12/ 3 (日) 14:00 第201回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

バーンスタイン: 〈キャンディード〉序曲

ターネジ: ドラムス協奏曲〈アースキン〉 (日本初演)

ガーシュイン: パリのアメリカ人

ラヴェル: ボレロ

指揮: ディエゴ・マテウス

ドラムス: ピーター・アースキン



ディエゴ・マテウス



ピーター・アースキン

お申し込み・  
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390  
(10:00~18:00/年中無休)

ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

# 11月~12月2日・3日 公演の聴きどころ

11月は、読響の創立55周年及びメシアン没後25周年を記念し、メシアンの歌劇〈アッジジの聖フランチェスコ〉(演奏会形式)に、常任指揮者就任8年目のカンブルランが満を持して取り組む。〈アッジジの聖フランチェスコ〉は、フランスの現代作曲家メシアンによる唯一の歌劇で、20世紀後半を代表するオペラのひとつ。中世イタリアの著名な聖人、聖フランチェスコの奇跡をめぐる名作で、約40種類の打楽器や3台のオンド・マルトノ(電子楽器)を含むオーケストラ、9人の独唱、10パートの合唱を含む総勢約240人という特殊な巨大編成を要するゆえ、上演の機会はまれ。日本では1986年に一部が演奏されたのみで、全曲は今回が日本初演となる。カンブルランは本作の公演を、パリやマドリッドですでに計24回も指揮し、曲のすみずみまで知り尽くしている。“メシアンのスペシャリスト”として世界的名声を誇るカンブルランと、国際的に活躍する歌手らとの歴史に残る大舞台をご堪能いただきたい。なお、本公演はびわ湖ホール(滋賀県大津市)が制作に協力し、同じキャストが同ホールで関西初演を行う。

12月2日、3日の《マチネーシリーズ》では、70~80年代に一世を風靡した伝説のバンド「ウェザー・リポート」で活躍し、今なおジャズ&フュージョン界のトップドラマーとして人気を誇るピーター・アースキンが共演。彼のためにターネジが作曲したドラムス協奏曲〈アースキン〉の日本初演に挑む。指揮にはベネズエラの音楽教育システム「エル・システマ」出身の気鋭、ディエゴ・マテウスが読響に初登場する。ガーシュインが1920年代のパリを生き生きと描いた〈パリのアメリカ人〉や、バーンスタインの〈キャンディード〉序曲といった20世紀のアメリカ音楽に、ラヴェル〈ボレロ〉と、リズムが躍動する楽しいプログラムをお届けする。(文責:事務局)

読響チケットWEB

検索

小森谷巧ら精鋭が繰り広げる渾身のアンサンブル

12/4 (月) 19:30 第16回 読響アンサンブル・シリーズ  
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《小森谷巧率いる精鋭の豊潤なブラームス》

ブラームス：スケルツォ (F. A. E. ソナタ)、ピアノ三重奏曲 第2番  
弦楽六重奏曲 第2番

ヴァイオリン：小森谷巧 (コンサートマスター)、小杉芳之

ヴィオラ：柳瀬省太 (ソロ・ヴィオラ)、森口恭子

チェロ：遠藤真理 (ソロ・チェロ)、渡部玄一 ピアノ：須関裕子



小森谷巧

マイスターのタクトが描く壮大なマーラーの宇宙

12/12 (火) 19:00 第573回 定期演奏会  
サントリーホール

マーラー：交響曲 第3番

指揮：コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者)

メゾ・ソプラノ：藤村実穂子

女声合唱：新国立劇場合唱団 合唱指揮：三澤洋史

児童合唱：TOKYO FM 少年合唱団、フレーベル少年合唱団



コルネリウス・  
マイスター

名匠クリヴィヌが〈第九〉を指揮。年末に響く“歓喜の歌”

12/17 (日) 14:00 第202回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

12/19 (火) 19:00 〈第九〉特別演奏会  
サントリーホール

12/20 (水) 19:00 第607回 名曲シリーズ  
サントリーホール

12/21 (木) 19:00 第18回 大阪定期演奏会  
フェスティバルホール (大阪)

12/23 (土) 14:00 第202回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

12/24 (日) 14:00 第99回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール



エマニュエル・  
クリヴィヌ

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

指揮：エマニュエル・クリヴィヌ

ソプラノ：インガー・ダム＝イェンセン

メゾ・ソプラノ：清水華澄

テノール：ドミニク・ヴォルティヒ

バス：妻屋秀和

合唱：新国立劇場合唱団 合唱指揮：三澤洋史



清水華澄



ドミニク・ヴォルティヒ



妻屋秀和

楽しい！カンブルランが贈る《ニューイヤー・コンサート》

1/6 (土) 14:00 第203回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

1/7 (日) 14:00 第203回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

J. シュトラウスⅡ：喜歌劇〈こうもり〉序曲、ワルツ〈南国のバラ〉

ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ

ヴェニャフスキ：華麗なるポロネーズ 第1番

デュカス：交響詩〈魔法使いの弟子〉

オッフェンバック：喜歌劇〈天国と地獄〉序曲

サン＝サーンス：歌劇〈サムソンとデリラ〉から“バックナール”

ワグネル：カルメン幻想曲

J. シュトラウスⅡ：トリッチ・トラッチ・ポルカ、ポルカ〈雷鳴と電光〉

ワルツ〈美しく青きドナウ〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

ヴァイオリン：三浦文彰



シルヴァン・  
カンブルラン



三浦文彰

“色彩の魔術師”が独自の解釈で描きあげるブルックナー

1/13 (土) 18:00 第574回 定期演奏会  
サントリーホール

ブリテン：歌劇〈ピーター・グライムズ〉から“4つの海の間奏曲”

ヴィトマン：クラリネット協奏曲〈エコー＝フラグメント〉(日本初演)

ブルックナー：交響曲 第6番

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

クラリネット：イェルク・ヴィトマン



イェルク・ヴィトマン

カンブルランが「ドイツ3大B」を指揮&名手ファウストと共演

1/19 (金) 19:00 第608回 名曲シリーズ  
サントリーホール

1/20 (土) 15:00 第7回 パルテノン名曲シリーズ  
パルテノン多摩大ホール

1/21 (日) 14:00 第100回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール

ブラームス：ヴァイオリン協奏曲

バッハ (マーラー編)：管弦楽組曲から

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

ヴァイオリン：イザベル・ファウスト



イザベル・ファウスト



## パルテノン&読響 ファミリーコンサート2017 ～オーケストラと巡る世界旅行～

■ 10/9 (月・祝) 15:00 パルテノン多摩 大ホール

指揮：松村秀明

ビゼー：歌劇〈カルメン〉より“アラゴネーズ”“間奏曲”“闘牛士”  
メンデルスゾーン：〈真夏の夜の夢〉より“結婚行進曲”  
チャイコフスキー：バレエ音楽〈くるみ割り人形〉より“花のワルツ”<sup>ほか</sup>

[料金] 一般 ¥2,500 学生 ¥1,000 小・中・高校生 ¥500

[お問い合わせ] チケットパルテノン 042-376-8181

---

## NISSAY OPERA 2017 オペラ〈ルサルカ〉

■ 11/9 (木) 13:30、11/11 (土) 13:30、11/12 (日) 13:30

日生劇場

指揮：山田和樹

演出：宮城聡

出演：田崎尚美、樋口達哉、清水那由太、清水華澄<sup>ほか</sup> (9日、12日)

竹多倫子、大槻孝志、妻屋秀和、与田朝子<sup>ほか</sup> (11日)

ドヴォルザーク：歌劇〈ルサルカ〉(全3幕・チェコ語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000 学生 ¥3,000

[お問い合わせ] 日生劇場 03-3503-3111

---

## Sony Music Foundation 東日本大震災 復興支援プロジェクト 仙台フィル×読響 〈第九〉チャリティ・コンサート

■ 12/27 (水) 18:30 東京オペラシティ コンサートホール

指揮・おはなし：山田和樹

ソプラノ：澤江衣里 メゾ・ソプラノ：鳥木弥生

テノール：藤田卓也 バリトン：小森輝彦

合唱：東京混声合唱団、武蔵野音楽大学合唱団

ベートーヴェン／交響曲 第9番〈合唱付き〉

[料金] 小・中・高校生 S ¥3,000 A ¥1,500

保護者 S ¥5,000 A ¥3,000

大人のみ S ¥4,500 (3階席のみ)

[お問い合わせ] 東京オペラシティチケットセンター 03-5353-9999